

## ふるさとと私

由布市立湯布院中学校 3年

かわ の の の は  
河野 乃々華

もし私が誰かに

「あなたにとってふるさとはどんな場所ですか。」と聞かれたら、まずは、

「自然が多く豊かな所です。」

と、答えるだろう。でも、絶対その次には

「そして、今は亡き祖父の思い出がたくさんあった場所です。」

と、言うと思う。

私には優しくて明るく散歩が大好きな祖父がいた。祖父は、湯布院の自然が大好きで庭の花や木々の手入れを定期的にしてたため遊びに行くとき必ず色とりどりの花達が笑顔でお出迎えをしてくれたことが今でも忘れられない。そして、祖父は季節に合わせて花を植えているため、例えば春は桃の花や桜が風でまい、6月は青や紫色に染まるアジサイ、夏には当時小さかった私よりも背が高く見上げないといけなかったヒマワリなどがその季節に合わせてキレイに咲く。私は祖父の家に行くたびに

「また春がやってきたなあ。」

とか

「夏がきたなあ。」

と、思っていた。

何より私が祖父に対して尊敬した事は、草むしりをする姿だ。「そんな事？」と思うかもしれない。でも、夏になりとても暑いなか麦わら帽子をまぶかにかぶり首にはタオルを巻きながら草むしりをひたすらしていた祖父を見て、私は「すごいなあ」と思っていたし、きれいな花が見れるのは、祖父の努力があるからなんだと気がつき感謝と尊敬の気持ちでいっぱいになった。

そして私が最も祖父と過ごした時間の中で好きだったのは祖父はもちろん兄や母と歩く散歩の時間だ。祖父の家の周りには交通量が少なかったため、散歩するには最適な場所だった。また、湯布院は自然に囲まれて空気が澄んでいるので嫌なことがあった日は深呼吸してリフレッシュするのも日課の1つだった。そんな祖父は散歩をしながら由布山を見ると「由布山は大きななあ、また色が変わってる。」と、毎回のようによく言っていた。今、思うと祖父に季節を教えてくれたのは由布山だったんだと思う。

祖父は私が小学校になると同時に、病気で入院をした。祖父の病室からは由布山がキレイに見えた。祖父は、入院をするとネガティブな言葉が口ぐせに変わってしまった。初めて見る暗い姿の祖父に対し私はいつでも大好きな家に帰ってこられるように、祖母と花や木々の手入れを定期的にするちと誓った。

そんなこんなで無事祖父は、退院することができた。帰ってきた祖父は花を見て

「キレイだなあ。ありがとう。」

と、言ってくれ私はおもわず祖母とハイタッチをするぐらいうれしかったことは今でも鮮明に覚えている。

そして月日は経ち、由布山が白く染まった頃祖父は、大好きだった花と自然に囲まれて旅立った。

3年がたった今、花で囲まれていた祖父の家の花は枯れ、寂しくなってしまった。今でも家に行くと祖父の笑った顔や大きくて温かい手、祖父との思い出全てが鮮明によみがえってくる。

祖父が亡くなった今、私は決めた事がある。それは祖父の代わりに私が家の周りをキレイにするということだ。祖父が手入れしつづけてくれた事を何年たっても忘れないよう草むしりや水やりをしようと思う。また、家だけでなく祖父が大好きだった「湯布院」も守り続けられるよう、ポイ捨てをしないなど今のキレイな環境を保てるように頑張ろうと思う。

祖父との思い出をいつまでも忘れないように。